

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 日本中世禅林における杜詩受容 : 忠孝への関心(中期の場合)・詩文詠出の様相 |
| Author(s) | 太田, 亨 |
| Citation | 中國中世文學研究 , 65 : 66 - 85 |
| Issue Date | 2015-03-20 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00042518 |
| Right | |
| Relation | |



の成君乃ち之を增益して三百家に至り四百巻と為す。嗚呼、何ぞ其れ多きや。文の多き者は以て治を察すべく、文の富む者は以て徳を觀るべし。眉山の郷 藏書多きは、叔陽の力を其の間に尽くす所以なり。豈に徒に然らんや。叔陽 郷に薦められ、既に此の書を成して余に之を序せんことを丐ふ。とある。「後村」は「後溪」の誤り。明・曹学全『蜀中広記』卷一〇〇に「後溪劉氏」と書かれている。「後溪劉氏」は劉光祖（一一四三～一二二二）を指す。字は徳修、後溪と号す。南宋の孝宗、光宗、寧宗期の人で、嘉定十五年（一二二二）に没した。ここから、『唐三百家文粹』は早くとも孝宗期に入つてようやく完成した書であると言える。これは『唐文粹』より二百年近く後である。

※本稿は校勘及び統計においては李由氏（南京大学博士課程、現在九州大学に交換留学中）の、資料の閲覧については甲斐雄一博士の協力を仰いだ。ここに感謝申し上げます。

日本中世禅林における杜詩受容

― 忠孝への関心（中期の場合）・詩文詠出の様相―

太田 亨

はじめに

禅僧が杜甫の忠孝心について称揚していたことは、既に朝倉尚氏が「禅林における杜甫像寸見―『文章一小技』と『杜甫忠心』において論じている」。その中で氏は、禅僧の詩文集と抄物（『杜詩統翠抄』は除く）の中から、杜甫と忠義が述べられている箇所を抽出し、禅僧が杜甫と忠心の関係に対してどのような観念を抱いていたかについて考証している。

筆者は、朝倉氏が中世禅林の作品集を一纏めで扱って考証しているのに対し、氏の論を参照しながらも、初期（鎌倉時代末期から南北朝時代末期）・中期（南北朝時代末期から応仁の乱頃）・後期（応仁の乱頃から室町時代末期）の作品集に分類し、各期ごとに杜甫の忠義がどのように詠出されていたかについて考証を進めている。既に初期において、日本禅僧が杜甫の為人、特に忠孝に着目し、自身の詩文にそれを詠出する傾向が強かったことを

論じた^[2]。

初期禅僧の詠出時の特徴として、「杜甫」や「忠孝」といった語句を直接に詠出するのではなく、忠孝に関する杜甫の逸話や杜詩句を間接的に詠じることが多いことが挙げられる。逸話に関しては、杜甫は母の諱が「海棠」であったため、「海棠」を詠じなかつたことを引き合いに出して、孝行心を詠出している。この逸話は晩唐の薛能が唱え始め、宋代以降も頻繁に取り上げられている。杜詩句に関して言えば、杜甫の「杜鵑」詩や「奉贈韋左丞丈二十二韻」詩における忠義を表す代表的な詩句等を引用し、忠義心を詠出している。これらの詩句は、中国の詩話や、諸注釈書において、杜甫の忠義を示す代表句として言及されている。

初期の詠出状況を呈した背景には、渡来僧を始めとして、日本のいわゆる高僧として処遇された諸僧が、三教一致の思想を唱え、既に儒教が必須の教養として受け入れられていたことがある。禅林は武家の庇護下にあり、

禪僧は、庇護者の意に適った仏事・法語を作製するに際し、忠孝を詠出することが望まれていた。かくして忠孝を詠出する場合、影響力の強い代表的人物として、当時の中国詩話等において最も高く評価されていた杜甫が着目されたのである。

一、初期からの継承

(1) 「海棠の説」

初期においては、乾峰士曇（三六五、三六六）等が、杜甫が蜀地方に咲く名花「海棠」を詩に詠み込んでいないことを指摘している。前述の如く、母の名前が「海棠」であるため、孝行心溢れる杜甫は海棠を詠むのを避けたという、晩唐の詩人・薛能に始まる逸話である。中期においては初期の傾向を継承し、義堂周信（三三五、三三六）は「陪大喜師觀櫻花次有作」（『空華集』巻一）詩で次のように詠じている。

海棠不入杜陵篇、流落巴雲蜀水辺。
幸是櫻花無此恨、開顏得近法王筵。

海棠 杜陵の篇に入らず、流落す 巴雲 蜀水の辺り。
幸ひに是れ櫻花 此の恨み無く、開顔して法王の筵に
近づくを得。

大喜法忻に従って桜の花を見て製した詩である。桜の花が、法王の筵の近くで咲き誇っているのに対し、海棠は母の諱を避けた杜甫の詩篇に詠出されることなく、杜甫と同様に蜀地方に流落しているとする。義堂は桜の花に對比して海棠を詠じており、杜甫の孝心を称揚する意味合いをあまり含んでいない。
同様に「題扇面」（『空華集』巻四）でも次のように詠じている。

海棠枝上一双禽、啼向春風似有心。
多少詩人題品遍、此花不入杜陵吟。

海棠の枝上一双の禽、啼きて春風に向かふは心有るに似たり。多少の詩人 題品遍きも、此の花 杜陵の吟に入らず。

ここでは扇に海棠と一對の鳥が描かれていたのであろう。そしてその海棠は、多くの詩人に詠出されながらも、杜甫には詠出されなかったとする。この詩も単に扇に描かれた海棠にまつわる故事として、杜甫の逸話を表面的に詠じただけである。初期のように、杜甫の忠孝を強く意

識したわけではないようである。

東沼周々（三三九、三四〇）は「扇面」（『流水集』巻三）で次のように詠っている。

李杜俱仙去、雅音久不聞。
詩情恋花否、二鳥海棠雲。

李杜 俱に仙となりて去り、雅音 久しく聞かず。詩情 花を恋するや否や、二鳥 海棠の雲。

の中。詩史 教を闕くも 能く画もて補ふ、一枝 婀娜 たり 玉屏風。

前半では蜀の地にかすかに降る雨の中、海棠の花が鮮やかに咲いていることを詠い、後半では「詩史」と呼ばれる杜甫の詩に海棠を伝えてはいないが、巧みな画でそれを補っていると屏風図を称している。

心田清播（三四七）は「謝庭玉惠海棠」（『聽雨外集』）で次のように詠っている。

海棠不入少陵題、來化禪齋法喜妻。
却笑太真連理約、風吹一夜蜀江西。

海棠 入らず 少陵の題、來りて禪齋に法喜の妻と化す。却って笑ふ 太真 連理の約、風は吹く 一夜 蜀江の西。

題下に「二鳥、有海棠」と註されていることから、この詩も義堂と同じく、一對の鳥と海棠が描かれた扇面に対して詠われたものと思われる。李白と杜甫が世を去ってから、風雅な詩韻を久しく聞くことがない。一体詩作を催す情が花を恋することがないのであろうか。二鳥は海棠の雲のごとき一叢の中に轉っているのに、杜甫なら致し方がないのだがと、海棠の花を詠まなかつた杜甫の逸話を想起させている。

瑞溪周鳳（三三九、三四〇）は「折枝海棠」（『臥雲稿』）で次のように詠っている。

蜀郷春半著嬌紅、睡思依々微雨中。
詩史闕教能画補、一枝婀娜玉屏風。

蜀郷 春半ばにして嬌紅を著す、睡思 依々たり 微雨

一句目では杜甫が海棠を詠まなかつたことを示し、その海棠が恵まれ来たり、この禪齋において法に触れて悦ぶ妻と化していることを言う。そして第三句においては、玄宗が海棠に比して比翼連理の妻として寵愛した楊貴妃に対して、妃が一夜蜀江の西の馬嵬で散つたのをかえって笑い、自分と海棠・妻に比される庭玉とは固い契りでもたらされた海棠を縁として、杜甫と楊貴妃の逸話を

引き合いに出して庭玉に謝意を表している。

他にも惟忠通恕（『四三』）は「賦海棠寄故人」（『雲壑猿吟』）で「杜老非無情思者」（杜老 情思無き者に非ず）と詠じ、西胤俊承（三五六、四三）は「雪裡海棠」（『真愚稿』）で「不受浣花詩酒汚」（浣花の詩酒に汚るることを受けず）と詠じ、一桂老人（不詳）は、「海棠」（『一桂老人詩』）で、「草堂未必恨遺愛」（草堂 未だ必ずしも遺愛を恨まず）と詠じている。

このように、「海棠の逸話」は、初期の詠出法と異なり、孝心を明記せずに海棠に関連する一故事として、杜甫が海棠を詠まなかったという特徴を詠出する傾向に変化している。中期になると、画面や扇面に海棠を描くことが増えたため、賛詩を付すにあたり、扇面の海棠の美しさをいかに引き立たせるかに焦点が絞られ、忠孝に関連する意味合いが避けられていったのであろう。初期より杜甫と海棠の関係については継承するものの、その詠出内容は変化している。

（2）杜詩句への着目

初期において、忠義を表現する代表として、杜甫の「奉贈韋左丞丈二十二韻」詩の句「致君堯舜上、再使風俗淳」（君を堯舜の上へ致し、再び風俗をして淳からしめん）を典拠とする傾向があった。中期においても愚中周及（二三三、四〇九）は「春草吟」（『草餘集』上）で次のように詠じている。

て拜鵬に倦む。

ここでは、方堂が越州に帰るに際し、杜甫の「杜鵬」詩に「身病不能拜、涙下如迸泉。」（身病みて拜する能はず、涙下りて迸泉の如し）とあるように、杜甫が晩年、病氣を患い、老い衰れたため、杜鵬を再拜することもできなくなったことを詠み、方堂を思いやっている。

他に古劍妙快（『蓬萊詩』）は、「悼道正居士」（『丁幻集』）で「畢竟誰生誰又滅、子規啼血暮山哀」（畢竟 誰か生じ誰か又た滅す、子規 啼血し 暮山哀し）と言い、杜甫の「杜鵬行」の句に「其聲哀痛口流血、所訴何事常區區」（其の聲 哀痛にして口より血を流し、訴ふる所 何事ぞ常に區區たる）とあるのを踏まえるが、これは単に杜鵬の口が赤く、鳴き声が悲痛であることを詠み込んでいる。

また桃隱玄朔（『蓬萊詩』）も「佛涅槃」（『桃隱集』）で「花雨岩前再相見、杜鵬哭血不如婦」（花雨 岩前 再び相見、杜鵬 哭血し 婦に如かず）と、同様に悲痛な鳴き声を発して血を流すことを詠じている。東沼周は、「詩送明溪少年歸東州之旧梓」（『流水集』卷三）詩で「自古東川無杜鵬、嗟君何事掉婦船」（古より東川に杜鵬無く、君を嗟く 何事ぞ婦船を掉す）と言い、杜甫の「杜鵬」詩の句に「西川有杜鵬、東川無杜鵬」（西川に杜鵬有り、東川に杜鵬無し）とあるのを踏まえる。これらは杜詩句を引用しながらも忠義の意味合いを付加していないようである。

中期になると、一般的な詩文が製されるようになり、「杜

保国元非専武略、安民豈在斬頑頭。
源家蘭玉發深省、立地致君堯舜間。

保国 元より武略を専らにするに非ず、安民 豈に頑頭を斬るに在らんや。源家の蘭玉 深省を發し、立地に君を堯舜の間に致さん。

ここでは先ず国を保んずるために、武を専らにしてはならず、民を安んずるために、愚かな者を斬ってはいけなさと、国政の在り方を説く。その上で、恐らくは源氏である足利將軍家の子弟がそのことを悟り、天子を速やかに堯舜のように致すであろうと詠じている。本詩は偈頌の部に分類されており、杜詩における忠義が重視されていることが窺える。

また杜鵬を天子の魂に見立て（いにしへの蜀主・望帝が蜀を去り、ほととぎすと化したという故事による）、常に杜鵬に再拜していた、と言う杜甫の忠義心を表す事項についても、初期より中期の禅僧に継承されている。曇聖瑞（『蓬萊詩』）は「次員送方堂座元皈越省師」（『幽貞集』）で次のように詠っている。

支郎耿介偏怜鶴、杜甫艱難倦拜鵬。

支郎は耿介にして偏へに鶴を好み、杜甫は艱難にし

甫」と「忠義」が併称されるようになったため（後述）、無理に杜詩句に忠義の意味合いを持たせることをしなくなったのであろう。

以上、中期の詩文集の中で、初期から継承されている杜甫の「忠孝」に関する事項を見てきた。孝行を表す「海棠」逸話、忠義を表す「杜鵬」詩句の引用は、初期の詠出法を継承しつつも、その内容は初期程に忠孝を意識しておらず、「君を堯舜の上へ致す」句の引用については、初期に続いて忠義の意を表していたことを確認した。同じ詠出法ながら、その内容は変化していることが窺える。

二、中期における杜甫の忠義心称揚の特徴

（1）総合的評価

中期に至って、杜甫の忠義心を称揚する場合、初期と較べて最も変化した点は、直接に杜甫の名と「忠義」を言出し、賛美することである。その先駆者となったのは義堂周信である。その「杜甫」（『空華集』卷一）と題する作品の序に次のように述べる。

余嘗讀老杜詩、感其方安史喪乱之際、不失君臣忠義之節。至若曰、文章一小技、於道未為尊、是余感之深者也。今觀茲画、風帽蹇驢。使人慨然、投筆起而吁。

余嘗て老杜の詩を讀むに、其の安史の喪乱の際に方

りて、君臣の忠義の節を失はざるに感ず。「文章は一
小技、道に於いて未だ尊しと為さず」と曰ふが若き
に至りては、是れ余が感の深き者なり。今茲の画を
観るに、風帽蹇驢。人をして慨然として、筆を投じ
て起ちて吁かしむ。

画図に描かれた杜甫を見た義堂の感懐である。義堂は、
杜甫が安史の乱に遭遇するに際して、決して君臣の忠義
を忘れなかつたことに感銘を受けている。

また義堂は「少陵」(『空華集』巻四)でも、杜甫の評
価を次のように詠じている。

風塵漠漠鬢絲絲、許國丹心只自知。
巴草未醫驢子瘦、更添詩瘦最難醫。

風塵 漠漠 鬢は絲絲、國に許す丹心 只だ自ら知るの
み。巴草 未だ驢子の瘦を醫さず、更に詩瘦を添じて
最も醫し難し。

ここでは、「兵戈の塵によって周りは薄暗く、鬢もすつか
り細くなってしまった。國に捧げた真心は自分だけが知
っている。」と言っており、杜甫の國への忠誠心を高く評
価している。このように中期になると、直接に「忠義」
を詠出し、杜甫を称賛するようになる。

ができるという。禪林における送別詩の中で頻繁に引用
された「春日憶李白」詩から忠誠心を読みとることがで
きることに言及している。

「贈翰林張四學士」(『批点本』巻一) 詩と忠義

西庵中蓮は「答邵菴老人、老人昨日見過、闕展待、末
篇及之」(『山林文集』)で次のように詠っている。

聖主垂恩金馬庭、杜陵新詠荔支青。
陰陽不沍宣和氣、調順風星与雨星。

聖主 恩を垂る 金馬庭、杜陵 新たに詠ず 荔支の青。
陰陽 宣和の氣を沍はず、風星と雨星とを調順す。

ここでは天子の恩が行き渡り、陰陽の氣、星の運行が正
しく行われていることを詠っている。その様子を述べる
に際し、杜甫の「贈翰林張四學士」詩の句「恩與荔支青」
(恩與 荔支青し)を典拠にしている。杜甫は張垞が天子
の恩榮に与っていることを詠じているが、中蓮は自身を
含めた皆が天子の恩恵を受けていることに對し、杜甫の
詩句を想起している。禪僧は、天子の恩恵を詠じるに際
し、杜甫が卑賤でありながらも、常に官職に登用されて
天子を補佐することを望んでいた忠義に着目したのであ
ろう。

(2) 特定詩に対する忠義心の称揚

中期において、禪僧が杜甫の忠義心を称揚した詩文は
多い。それらは杜詩の講義が盛んに行われ、禪僧自身が
杜詩を消化した上での実感であろう。結果、禪僧の詩文
に杜甫の特定の詩や詩句と忠心を結びつけて詠出される
ことが屢々見られる。以下用例を示すが、杜甫の特定の
詩について、その詩が所収される『集千家註批点杜工部
詩集』(以下『批点本』と略称)の巻数を注記する。

「春日憶李白」(『批点本』巻一) 詩と忠義

惟肖得巖(三〇、四三七)は、「渭材字說」(『東海瑤華集』)
で、杜甫の「春日憶李白」詩の「渭北春天樹、江東日暮
雲」(渭北春天の樹、江東日暮の雲)についての解釈を行
った後、次のように言う。

吁、文章至于李杜、髮無遺者也。其語如此、則朋友
責善不已、忠厚之義、以此可觀之矣。

吁、文章は李杜に至りて、髮も遺す者無きなり。

其の語此の如くんば、則ち朋友責善已まず、忠厚の
義、此れを以て之を觀るべし。

杜甫と李白にいたり、全ての詩文が余すところなく表現
し尽くされたことを指摘し、この詩を読めば、杜甫と李
白の朋友による積善がやまず、忠義心の厚さを見ることが

「麗人行」(『批点本』巻二)と忠義

一桂老人は「讀杜甫麗人行」(『一桂老人詩』)に次の
ように詠っている。

一聲璧月逐東流、馬上歌殘清夜遊。

詩史筆誅今視古、麗人春溢曲江頭。

一聲 璧月 東を逐ひて流れ、馬上 歌は残す 清夜の
遊び。詩史 筆誅し 今古を視る、麗人 春 曲江の頭
に溢る。

杜甫の「麗人行」を読み、その詩の様子と自らの感懐を
詠じている。前半は当時の煌びやかな宴の様子を詠じて
いる。そして第三句において、杜甫の詩は「詩史」と呼
ばれ、杜甫はその正義心から筆で人の罪悪をも詠み込ん
でいるため、今にあつて昔のことを理解することができる
という。

「北征」(『批点本』巻三) 詩と忠義

瑞溪周鳳は「杜甫北征圖」(『臥雲稿』)で次のように
詠じている。

杜子蒼芒去問家、驢疲僕倦路猶賒。

東遊恰似北征客、菊亦今秋已欲花。

杜子蒼世として去きて家を問ふ、驢疲れ僕倦むも路猶ほ賒し。東遊恰も似たり北征の客、菊も亦た今秋已に花さかんと欲す。

この画図は杜甫が房琯を弁護したため、君への忠義を果たそうとしながら、かえって肅宗の逆鱗に触れ、鄜州にいる家族の許に帰る時に製された「北征」詩を基に描かれたものである。瑞溪のこの詩は『翰林五鳳集』にも採録されており、そこに「為東婦人題」（東婦の人が為に題す）とあることから、東方に還帰する人のために製されたことが分かる。第一句は「北征」詩の句「杜子將北征、蒼茫問家室」（杜子將に北征して、蒼茫 家室を問はんとなす）を典拠にし、杜甫が家族の安否に不安を抱きながらも北の鄜州に赴いたことを詠み、第二句で道中に驢馬も従者も疲れ果てているが、道は遙かに続くことを詠んでいる。そして第三句では東方へ赴く人に、道中が杜甫の北征に似るとして、その困難を憐れみ、末句で「北征」詩に「菊垂今秋花、石戴古車轍」（菊は垂る 今秋の花、石は戴く 古車轍）とあるのを意識し、杜甫及び東婦（遊）の人の困難に関係なく、菊が今年の秋も花を咲かせようとしていることを詠じる。

心華元棣は「眞侍者小祥忌祭文」（『業鏡台』）で次のように述べている。

立天地之間者、三十余歳。汝、獨季甫十有四歳、来

ける傾向が強くなる。杜甫の忠義に対する認識と「北征」詩の理解が深まりつつある証と言えよう。

「曲江二首」（『批点本』巻四）詩と忠義

東沼周々は「曲江春望」（『流水集』巻三）で次のように詠じている。

曲江渺渺水依依、秦漢時移唐亦非。
唯有風流杜陵老、為君每日典春衣。

曲江渺渺として水依依たり、秦漢 時移りて唐も亦非なり。唯だ風流有るは杜陵の老、君が為に日毎に春衣を典す。

ここでは前半で曲江の様子に触れた後、後半で杜甫について言う。ただ風流心の存するのは杜甫だけであり、天子のために毎日、衣を質に入れて泥酔しているとす。これは杜甫の「曲江二首其二」詩の句「朝回日日典春衣、每日江頭盡醉歸」（朝より回りて日日 春衣を典す、日毎に江頭に酔ひを盡くして歸る）を典拠にしている。朝廷を退出すると、毎日、春の衣を質に入れ、曲江の畔で泥酔して帰る、と少し投げやりになっている杜甫に対して、東沼は「為君」と詠じており、忠義心の裏返しとして好ましく詠じている。

從吾問字。試把老杜北征、授之一遍。纔食頃而背誦之、群兒服其敏也。居無何日、非故吾矣。

天地の間に立つこと、三十余歳。汝、獨り季甫かに十有四歳、来りて吾に従ひて字を問ふ。試みに老杜の「北征」を把りて、之の一遍を授く。纔食の頃に之を背誦し、群兒 其の敏に服するなり。居すること何れの日も無く、故の吾に非ざるなり。

三十余歳で示寂した眞侍者について、ここでは十四歳の折、初めて学問を学ぶに際し、杜甫の「北征」詩を暗唱させたところ、その吸収力の速さと鋭敏ぶりに皆驚嘆している。なお、『空華日用工夫略集』応安三年（三三〇）二月二十三日の条でも秀嵩侍者が「北征」詩の講義を求めており、「北征」詩が若い禅僧にとって最初に学ぶ杜詩の代表作品の一つであったことが察せられる。

瑞溪と心華の作品からは、「北征」詩が杜甫の忠義と直接には結びつかない。が、中期に至って、杜甫の代表作品として受け容れられている。参考までに後期になると、雪嶺永瑾は「讀杜甫北征詩」（『梅溪集』）詩で、「鐵鑄忠肝亦応裂、戰場寒月獨夜時」（鐵鑄の忠肝 亦た応に裂くべし、戰場 寒月 獨夜の時）と詠じ、また春沢永恩は「讀杜甫北征詩」（『枯木稿』）詩で、「北征路遠杜陵翁、萬里鄜州孤抱忠」（北征 路遠し 杜陵の翁、萬里 鄜州 孤り忠を抱く）と詠じ、「北征」詩と杜甫の忠義を直接に結びつ

「端午日賜衣」（『批点本』巻四）詩と忠義

一桂老人は「書杜陵端午賜衣詩後」（『建長寺龍源菴所藏詩集』）詩で次のように詠っている。

一片香羅白雪寒、少陵拜賜激忠肝。
皇天雨露濡毫末、遺墨千年猶未乾。

一片の香羅 白雪のごとく寒し、少陵 賜を拜して忠肝を激す。皇天の雨露 毫末を濡し、遺墨 千年猶ほ未だ乾かず。

これは杜甫の「端午日賜衣」詩を読んだ後の感想である。その詩には「宮衣亦有名、端午被恩榮。細葛含風軟、香羅疊雪輕。自天題處濕、當暑著來清。意內稱長短、終身荷聖情」（宮衣 亦た名有り、端午 恩榮を被る。細葛 風を含んで軟かに、香羅 雪を疊んで輕し。天より題する處は濕ひ、暑に當りて著け來れば清し。意内 長短に称ひ、終身 聖情を荷ふ）とあり、乾元元年の五月五日、左拾遺にあつた杜甫が宮中より衣を賜つた時に詠じられた詩である。一桂は、杜甫の詩を読んだ後、香りをくゆらした一枚の衣は白い雪のように薄く、杜甫はその贈り物をいただいて、忠義心を更に激しくした。天子より下される恩恵が細部にまで行き届き、天子が筆で題された墨の跡は千年たつても未だに乾くことはない、と詠んでいる。

「洗兵馬」(『批点本』巻五) 詩と忠義

一 曇聖瑞は「讀杜甫洗馬行」(『幽貞集』) で次のように詠じている。

聖朝社稷奈安危、胡馬春驕凝碧池。

諸將如綸功第一、其奔須画少陵詩。

聖朝の社稷なん奈ぞ安危なる、胡馬 春に驕る凝碧池。

諸將 功を給たまむること第一なるが如し、其れ奔あはれむ須く少陵の詩に画えがかるべきを。

ここで一曇は杜甫の「洗兵馬」詩を読んで感想を述べている。清明な朝廷が危機に瀕しており、春もたけなわな時、胡の馬が凝碧池に集まっている。諸將は功をおさめることが第一であるが、杜甫の詩に描かれるべきであったのにそうでないのは不憫に思われるとする。詩の表面からは杜甫の忠義を読み取りがたいが、後期の禪僧である春澤永恩は、「讀杜甫洗兵馬行」詩に「杜甫忠心誰以加」(杜甫の忠心 誰か以て加へん)と詠じ、忠義を高く評価している。「洗兵馬」では、冒頭に官軍が勝ち戦を報告する様子は詠じ、武器を永久に使わなくなるようになることを願っている。一曇の詩の末句も、杜甫に忠義心があるが故に、時の官軍の状況を常に心配し、逐一その状況を詩に詠み込んだことを意識しているのであろう。

しめ、其の故人機天用に贈る。天用嘗て予が香を東山に侍するを以て、必ず予をして叙を為らしめて、諸を編首に冠せんと欲す。古の詞を聞くに、人は君臣の節義有る者を以て、諷詠に寓するに、或いは美人と称し、或いは佳人と曰ふは、前の少陵詩に云ふ者の如し。蓋し唐の天宝の乱、君臣道を失ひ、上下相疑ひ、士の節義を守る者罕まれなるも、而るに獨り子美のみ、秦蜀荆楚の間を旅すれども、而るに國を憂ひて時を傷み、竊かに忠義を以て其の君に期す。是を以て其の詩の末章に、「天寒くして翠袖薄し、日暮れて修竹に倚る」と曰ふは、以て歳寒に変ぜざるの節操を見るに足るなり。然らば則ち節義は固より人道の終なり。夫れ人君た為る者、節義無ければ、則ち克く其の恩を終へず。人臣た為る者、節義無ければ、則ち克く其の忠を終へず。人の父子兄弟為る者、節義無ければ、則ち克く其の慈愛孝悌を終へず。師徒朋友為る者、節義無ければ、則ち克く其の受授講習の業を終へず。故に曰く、節義は人道の終なり、と。今茲の仕を觀るに、惟忠・天用は、其の節義を以て克く其の友を終ふる者なるか。焉れを果せば則ち麗澤滋益の道なり。尚ぶべきなり。是に於いて序す。

ここでは惟忠通恕が天用口機に詩を贈るに際し、「佳人」詩の首聯を分字して韻に用い、詩を能くする諸友とともに製することを企画したことを述べている。天用は義堂

「佳人」(『批点本』巻五) 詩と忠義

義堂周信は「贈機上人詩叙」(機上人を贈る詩叙)(『空華集』巻十三)の中で次のように述べている。

絶代有佳人、幽居在空谷。此一聯迺唐詩史杜少陵、詠佳人之首句也。恕惟忠、拆之為韻、率諸友能詩者、各賦詩八句者一章、贈其故人機天用。天用以嘗侍予香東山、必欲予為叙、冠諸編首。聞古之詞、人以君臣有節義者、寓於諷詠、或称美人、或曰佳人、如前少陵詩云者。蓋唐天宝之乱、君臣失道、上下相疑。士之守節義者罕矣、而獨子美、旅于秦蜀荆楚間、而憂國傷時、竊以忠義期其君。是以其詩末章曰、天寒翠袖薄、日暮倚修竹、足以見乎歲寒弗變之節操也。然則節義固人道之終也。夫為人君者、無節義、則不克終其恩。為人臣者、無節義、則不克終其忠。為人父子兄弟者、無節義、則不克終其慈愛孝悌。為師徒朋友者、無節義、則不克終其受授講習之業。故曰、節義人道之終也。今觀茲什、惟忠天用、其以節義克終其友者歟。果焉則麗澤滋益之道也。可尚焉。於是乎序。

「絶代に佳人有り、幽居して空谷に在り」と。此の一聯は迺ち唐の詩史杜少陵の、「佳人」を詠ずるの首句なり。恕惟忠、之を拆わかちて韻と為し、諸友の詩を能くする者を率いて、各々詩八句なる者一章を賦さ

が建仁寺に住した時の香葉侍者であり、その縁で特に序文を求めている。そこで義堂は「佳人」詩を引きながら、節義について説き、杜甫自身の忠義についても触れる。いにしえの詩人を見てみると、君臣に節義が有ることを詠うのに、「美人」の語、もしくは「佳人」の語を用いており、杜甫の詩でもそうであることを言う。唐の天宝の亂において、君臣は皆道を失い、位の上の者も下の者もお互いを疑い、士としての節義を守っていた人は稀少であった。しかし、その中でただ一人杜甫のみが様々な土地を流浪したにもかかわらず、國を憂え時世を嘆き悲しみ、密かに天子への忠誠を果たしたとする。よって詩の最後の「天寒くして翠袖薄し、日暮れて修竹に倚る」の詩句には、変わらない節義を見て取ることができるといふ。このことを踏まえ、節義というものは人道の究極のものであると説き、例として君臣・父子兄弟・師徒朋友のそれぞれに節義がなければ各々の關係を保つことができないとし、惟忠と天用が朋友の節義を厳守していると結論している。義堂周信が杜詩の全ての詩に対してどのような解釈をしたかは不明であるが、節義・忠義を重視しながら解釈していたことは間違いないと思われる。義堂は「為春雷谷題鉄舟蘭竹」(『空華集』巻九)詩においても次のように詠じている。

山林歲晏氣淒涼、愛此幽花独自芳。
空谷佳人顔似玉、臨江節士鬢如霜。

山林 歳晏 気は凄凉たり、此の幽花の独り自ら芳しきことを愛す。空谷の佳人 顔玉に似る、臨江の節士 鬢霜の如し。

ここでは奥ゆかしい花・蘭が独り芳しい香りを発している中、杜詩句より引用した「空谷の佳人」と、優れた節操の持ち主である「臨江の節士」である屈原が詠われている。前掲の義堂の「佳人」詩の解釈より、「空谷の佳人」は人氣のない山谷で節操を守る美人の意から、苦境において節義を守る人物を意味しよう。

「空谷佳人」は義堂以後の禅僧も詠出することが多い。心華元棟（生年詳）は「書大休菴壁」〔『心華詩藁』〕で次のように詠っている。

何啻泰山無猛政、或応空谷有佳人。

何ぞた啻に泰山に猛政無きのみならんや、或いは応に空谷に佳人有るべし。

どうしてただに泰山に猛虎苛政がないだけであらうか、あるいはまさに空谷に佳人が居るように、何処においても例外なく隠れて節義を守っている人がいることを言う。この詩の作詩状況について、惟忠通恕は「寄心華首座」〔『雲壑猿吟』〕に次のように言う。

空谷有佳人、獨操猗蘭而慕潛聖、雖否恭相極焉。

空谷に佳人有り、獨り猗蘭を操り潛聖を慕ふ、否とも恭しく相極まる。

ここでも空谷で節義を守る佳人と、時の世に自身が受け入れられなくても義を通した屈原が併称されている。

惟肖得巖は「伯清字説」〔『東海瓊華集』一〕で、間接的に「佳人」詩の「在山泉水清、出山泉水濁」（山に在れば泉水清し、山を出づれば泉水濁る）句を字号の典拠として引用している。また江西龍派は、「和答雪心」〔『統翠詩集』〕詩で、「憶昔荒村建子正、拾遺愁殺錦官城。憑詩聊向佳人説、依藻寒魚今日情」（憶ふ昔荒村建子正、拾遺愁殺す錦官城。詩に憑りて聊か佳人に向かひて説く、藻に依る寒魚今日の情と）と詠じ、後半句において、詩を詠んで節義を守る佳人（雪心）に説くことは、自身は寒さを避けて水草による魚のように、雪心の温情に触れているとする。東沼周も「次韻南棠賀正作」〔『流水集』卷三〕詩で、「佳人詩似漢寬詔」（佳人詩は漢の寬詔に似る）と詠じ、「和西胄試毫韻」〔『流水集』卷三〕詩で、「佳人詩律天応感」（佳人詩律天応に感ずべし）と詠じ、その詩を高く評価している。

義堂や心華を通じて、「佳人」詩の節義は禅林に広まり、浸透していったようである。

心華老人、僑于作州興雲、殆二祀矣。予每見山陽來者、必索其詩文、圭復而止、偶得山中口号一篇、曰、何啻泰山無猛政、或応空谷有佳人。吁土地人物之盛、形之吟詠、蓋大雅之遺意也。

心華老人、作州の興雲に僑り、殆ど二祀なり。予毎に山陽より來る者を見るに、必ず其の詩文を索め、圭復して止むに、偶々山中口号の一篇を得、曰く、何ぞ啻に泰山に猛政無きのみならんや、或いは応に空谷に佳人有るべし、と。吁土地人物の盛、之を吟詠に形すは、蓋し大雅の遺意なり。

心華は美作国の興雲寺に赴き、ほぼ二年になるが、惟忠は常に山陽からの來往者を見ると、必ず当地での詩文を求め、返ってきた手紙（詩文）を繰り返し読み、手元に止めていたところ、その中に偶々前掲の「書大休菴壁」の一篇を得、そこに「空谷佳人」が詠出されていたのである。心華は美作国において節義を貫いていることを伝えなかったのであらうか。惟忠はそれを読んで土地柄・人物が盛んであることを吟詠で表現することは、杜甫以来の伝統であると解している。「佳人」詩が禅林に浸透していたことが窺える。

次いで、信仲以篤（？一四五）は「愚極住普門」〔『晦夫集』〕疏で次のように述べる。

「絶句四首其三」〔『批点本』卷八〕詩と忠義

杜甫の「絶句四首其三」詩の句「兩個黃鸝鳴翠柳、一行白鷺上青天。窓含西嶺千秋雪、門泊東吳萬里船」（兩個の黃鸝翠柳に鳴き、一行の白鷺青天に上る。窓には含む西嶺千秋の雪、門には泊す東吳萬里の船）は、画面や扇面の対象となり、禅僧がそれに賛詩を付している例が見られる。

東沼周は「扇面」〔『流水集』卷三〕詩で次のように詠じている。

遠夢寄南風、孤忠朝北闕。

胡為浣花翁、白髮西山雪。

遠夢 南風に寄す、孤忠 北闕に朝す。胡為れぞ浣花翁、白髮 西山の雪。

この詩の題注に「有總含西嶺千秋雪之意、寄越州一源侍者」（總には含む 西嶺千秋の雪）の意有り、越州の一源侍者に寄す）とあり、杜甫の「絶句四首其三」詩の句を画材にした扇面であることが分かる。そこには天子の前で一人忠義を貫いた杜甫が、どうして浣花溪の翁となり、白髮にこの西嶺の雪を戴くのか、と忠義溢れる杜甫と、官職に就けず、望み通りにならない杜甫が詠出されている。

東沼周^〇は当該詩を画材としながら「扇面」と題する詩をさらに一首製している。

西嶺當窓雪半空、朝天夢遠浣花翁。
斯身若化一行白、豈待吳船萬里風。

西嶺窓に當りて雪半ば空し、朝天夢は遠し浣花翁。斯の身若し一行の白きに化せば、豈に吳船萬里の風を待たん。

前掲の詩と同じ扇面に対してであろうか。その画図を見て、朝廷に参内する夢が叶いそうにない杜甫も、図柄と同じ景色を眺めていたことを想像したのである。そしてもしその身が白鷺の一行になれたならば、呉に行く船に風が吹くのを待つ必要がないであろう、と杜甫に代わつての感懐を詠じている。両詩共に蜀に滞在していながらも朝廷を思う杜甫が詠出されている。東沼は蜀に滞在する杜甫を忠義の士と評し、その心境を推し量つて詠じたのであろう。

「茅屋為秋風所破歌」(『批点本』卷十二) 詩と忠義

太白真玄(三〇四)は、『峨眉鴉臬集』に所収される「大中任南禪」疏で杜甫と忠心を共に言出している。

廣厦庇天下士、杜老忠心。長裘蓋洛陽城、香山大志。

既能寛而容衆者、豈不急於度生乎。

廣厦もて天下の士を庇ふは、杜老の忠心なり。長き裘もて洛陽城を蓋ふは、香山の大志なり。既に能く寛くして衆を容るる者、豈に度生を急がざらんや。

引用文冒頭の二句、これは杜甫の「茅屋為秋風所破歌」(茅屋秋風の破らる所と為る歌)の句に「安得廣厦千萬間、大庇天下寒士俱歡顏」(安んぞ得ん廣厦千萬間、大いに天下の寒士を庇ひて俱に歡顔す)とあるのに拠っている。千間・万間もある大きな家に貧しい人々を住まわせて喜ばせたいとする杜甫に忠心を読み取っている。

以上、禪僧は杜甫の「春日憶李白」「贈翰林張四學士」「麗人行」「北征」「曲江」「端午日賜衣」「洗兵馬」「佳人」「絶句四首其三」「茅屋為秋風所破歌」の各詩に杜甫の忠義を見出し、詩文に詠じている。初期では詠出に關して杜甫の名を詠み込んだり、詠み込まなかつたり曖昧であったのに対し、中期では杜甫の忠義が表れている詩を厳選し、それを消化した上で自身の詩に詠じており、より具体化している。

また詠出された杜甫の作品であるが、いずれも『批点本』の卷十二以前の巻に所収されている点に留意される。当代における『批点本』の影響が濃厚であると考えられる。中期以降、日本禪林において主流であった注釈書は

さるるが為にす。伏して惟ふに、文武兼ねて修め、忠孝全て備ふ。九州の士庶を亭毒し、坐して四海の太平を致す。

ここでは関東將軍(関東管領)のための拈香において、文武を修め、忠孝を備えていたことを称揚し、多くの民を育て養ひ、太平の世を築いたことを指摘する。

東沼周^〇は「祥光寺殿下火」(『流水集』) 法語で次のように言う。

新捐館祥光寺殿前江州太守源忠恩公大居士廬。天下無双忠臣、日本第一英烈。論兵雖擣萬夫先、叩禪早入三會室。

新たに捐館するは祥光寺殿前江州太守源忠恩公大居士。天下無双の忠臣にして、日本第一の英烈なり。兵を論ずれば萬夫の先を擣すると雖も、禪を叩けば早に三會の室に入る。

東沼は六角久頼の下火法語において、天下無双の忠臣であり、日本一の優れた功績を持つことを称揚する。兵を論ずれば誰よりも機先を制し、禪門に入れば早くより春屋妙葩の三会門下(夢窓下)に入ったことを言う。

天祥一麟(三三三、四〇七)は「明月院殿天澍合六七拈香仏事」(『天祥和尚録』乾) 法語で次のように言う。

三、**禪僧の忠義に対する意識**
禪僧が杜甫と忠義を深く結びつけるようになったのはなぜであろうか。中期における禪僧の忠義に対する意識を検討する。
初期禪林において、人(特に武家)を称揚するに際して、忠孝心は必要な要素として既に取り込まれていた。渡来僧の手によって三教一致の思想が浸透し、禪僧は必須の教養として『論語』等を身につけていた。禪僧は武家の庇護下にあり、彼らの仏事法語を作製するに当たり、忠孝を詠出することが多かった。そしてその初期の傾向は、中期に継承される³⁾。若干の例を取り上げる。
古劍妙快は「関東將軍香」(『了幻集』) 法語で次のように言う。

此香、奉為関東都元帥左武衛將軍、増崇祿位。伏惟、文武兼修、忠孝全備。亭毒九州士庶、坐致四海太平。

此香、奉じて関東都元帥左武衛將軍の、祿位を増崇

伏惟、靈位、文武兼備、忠孝俱全。撫育百姓施仁政、輔佐上將執化權。八州管内、威德風行草偃、四夷塞外、号令地轉天旋。

伏して惟ふに、靈位、文武兼ねて備はり、忠孝俱に全し。百姓を撫育して仁政を施し、上將を輔佐して化權を執る。八州管内、威徳は風行草偃し、四夷塞外、号令は地転天旋す。

天祥は上杉憲方の六七日忌の拈香法語で、型のごとく文武と忠孝を称揚する。そして下は百姓を慈しみ育て、上は上將を輔佐し政治を助けたことを言う。よって管理下の関八州では盛んな徳が民を化し、号令は天地に響いたと称する。

惟肖得巖は「祭赤松公実翁」(『東海瓊華集』二)文で次のように述べている。

曰此女功、豈於我慝。庭闈先孝、社稷竭忠、君之勞賢、厥報不空。

此なまこの女の功を曰ふに、豈に我に於いて慝さんや。庭闈にて孝を先にし、社稷にて忠を竭くす。君の労賢、厥の報空しからず。

ある。

余又説、毎々命儒令講孝経並貞観政要等、是乃国家政道助也。何則凡人不知仁義五常之道、則不遵君命。不遵君命、則政事不行也。自今以後、宜召粟田口儒人、令講孝経・政要等、且亦命諸寺長老令講経録、則庶幾国家安寧、尊徳日新也。府君頷之。

余又た説く、毎々儒に命じて『孝経』並びに『貞観政要』等を講ぜしむるは、是れ乃ち国家政道の助なり。何ぞ則ち凡そ人は仁義五常の道知らざれば、則ち君命に遵はず。君命に遵はざれば、則ち政事行はざるなり。今より以後、宜しく粟田口儒人を召し、孝経・政要等を講ぜしめ、且つ亦た諸寺の長老に命じて経録を講ぜしむるは、則ち国家安寧にして、尊徳日々新たなるを庶幾こひねがふなり。府君之に頷づく。

ここでは『孝経』と『貞観政要』が国家政治を助けるものであり、安寧の世にするために儒者に講義させることを薦めている。また義堂は次いで康暦二年八月七日と十日には、四書の一つである『中庸』の講義を義満に行っている。康暦二年十一月七日には『孟子』をすすめ、永徳元年九月二十七日の条には次のように言う。

府君・管領入寺。君問孟子書中数件事。余説儒釈同

題下に「代夫人氏」とあり、夫人に代わつての代作であることが判明する。父母には孝行し、国家にあつては忠を尽くしたことを言う。

このように武家の仏事において、故人の忠義を称揚する場合が多い。東沼周は「圓通院殿秀林栄公居士下火」(『流水集』)法語で、「教子教孫、曰孝曰忠。」(子を教へ孫を教ふるに、孝と曰ひ忠と曰ふ。)と言ひ、子孫に忠孝の重要性を説いたことを称している。

忠孝心を持つて天子を輔佐し、四方を太平に導くことが最も尊ばれたようである。禅林が武家社会と密接に関わつてくるにつれ、国家に対する忠義、天子に対する忠義が、いよいよ重視されている。

国家における忠孝の重要性は、『論語』八佾に「君は臣を使ふに礼を以てし、臣は君に事ふるに忠を以てす」にあるように、儒学の思想に代表される。この儒学思想は禅林にどのように受け入れられていたのであるか。中期における文学の基礎を作つたと言つても過言ではない義堂周信の四書を始めとする儒学思想に対する考え方を見てみたい。

『空華日用工夫略集』に、義堂周信と時の権力者・足利義満の交流がある。義堂は応安五年二月十日に『貞観政要』に天下を治める条件が載つていたので義満に読むようにすすめ、二十六日と翌年の二月一日に講義している。また同時期(応安五年三月一日)に『輔教篇』も講義している。応安七年十月二十四日の条には次のように

異差別。

府君・管領寺に入る。君孟子書中の数件の事を問ふ。余儒釈の同異差別を説く。

義満は言われたとおりに『孟子』を読み、幾つかの質問を義堂に発した際、義堂は儒教と仏教の同異点・差別点について説明している。また永徳元年十一月七日にも『孟子』について質問され、それに答えた後、「君有心於学問、必有補於政教。宜相統勿怠」(君心に学問を有せば、必ず政教を補ふこと有り。宜しく相統して怠る勿かれ)と、学問を続け、怠つてはいけなさと義満を戒めている。同年十二月二日にも『孟子』について質問され、義堂は四書集注の注を持ち出して答えている。その後、『大学』の効用について尋ねられ、次のように答えている。

余曰、大学乃四書之一、唐人学四書者、先讀大学。意者、治国家者、先明德正心誠意修身、最緊要也。敢請、殿下四書之学弗怠、則天下不待令而治矣。

余曰く、『大学』は乃ち四書の一にして、唐人の四書を学ぶ者、先づ『大学』を読む。意は、国家を治むる者、先づ明德・正心・誠意・修身、最も緊要なり。敢へて請ふ、殿下四書の学怠らざれば、則ち天下令を待たずして治まる。

『大学』は四書の一つであり、唐人がまず始めに読むものだという。そしてそれは国家を治める者が徳を積むために最適の書であるとする。義堂は義満が四書の習得を怠らなければ、天下は自然と治まるとまで述べている。永徳元年十二月二十七日にも「大学・中庸最爲治世之書」（大学・中庸は最も治世の書なり）とある。永徳二年二月十八日には義満に『中庸』を質問され、永徳二年二月二十九日の条には『論語』の講義を行った後、義満の質問に次のように応じている。

君又問仁義二字。余因引輔教編、合說儒積二教之義。在儒仁・義・礼・智・信。在積不殺・不盜・不姪・不妄・不酒。儒謂之五常、積謂之五戒。其名異其義同。佛初爲下根、凡夫人天乘、即五戒十善也。然則仏教得兼儒教、儒教不得兼仏教。君又問中庸二字。余曰、喜怒哀樂未發、謂之中、發而中節、謂之和。和即庸也。謂未發即仏教一念未生以前也。這箇田地、非識情能所及、但能忘情者得到云々。

君又た仁義の二字を問ふ。余因りて輔教編を引き、合はせて儒積二教の義を説く。儒に在りては仁・義・礼・智・信。積に在りては不殺・不盜・不姪・不妄・不酒。儒は之を五常と謂ひ、積は之を五戒と謂ふ。其の名異なれども其の義同じ。佛も初め下根たれば、

また禅僧が儒学思想を得ることの効能について、義堂は「序用文上人詩軸」（『空華集』卷十二）文で次のように述べている。

文字章句、言文之體也。仁義禮信、人文之體也。（略）在人、則仁乎父子、義乎君臣、禮乎夫婦、信乎朋友。在言、則宜筆者筆之、宜削者削之。是其用也。惟四者之最急於世用者、莫人文若。然人文假言文而行。言文由人文而發。何則凡仁義云者、皆出乎心、而形乎聲。而乃文字之韻、律之而用之。以是論之、言文固末、而人文為之本。苟善用其文者、必務其本。

文字章句は、言文の體なり。仁義禮信は、人文の體なり。（略）人に在りては、則ち父子に仁あり、君臣に義あり、夫婦に禮あり、朋友に信あり。言に在りては、則ち宜しく筆すべき者は之を筆し、宜しく削るべき者は之を削る。是れ其の用なり。惟の四者の最も世用に急なるは、人文に若くは莫し。然れども人文は言文を假りて行はる。言文は人文に由りて發す。何となれば則ち凡そ仁義と云ふは、皆な心より出で、聲に形る。而して乃ち文字の韻は、之を律して之を用ふ。是を以て之を論ずれば、言文は固より末にして、而して人文は之を本と爲す。苟も善く其の文を用ふる者は、必ず其の本を務む。

凡そ夫れ人天乗も、即ち五戒十善なり。然れば則ち仏教は儒教を兼ねるを得、儒教は佛教を兼ねるを得ず。君又た中庸の二字を問ふ。余曰く、喜怒哀樂未だ發せざる、之を中と謂ひ、發して節に中る、之を和と謂ふ。和は即ち庸なり。未だ發せざると謂ふは即ち仏教の一念未だ生ぜざる以前なり。這れ箇の田地は、情を識りて能く及ぶ所に非ず、但し能く情を忘るる者の到るを得云々。

ここではまず仁義について説いている。儒学の五常と仏学の五戒とが同義であり、佛教は儒教を兼ねるが、儒教は仏教を兼ねないことを説明する。そして中庸について、「未發」の状態が仏教の「一念未生」前の状態と同じであるとし、儒と佛が変わらないことを説く。その証拠に、永徳元年九月二十二日には、「宋朝以後儒学者、皆參吾禅宗、一分發明心理。故註書與章句、迴然別矣」（宋朝以後の儒学者、皆な吾が禅宗に參じ、一分心理を發明す。故に註書と章句とは、迴然として別なり）と言ひ、宋代の儒学者はみな禅宗に參じ、悟りを得るに到ったという。

以上のように、義堂は、禅宗を誇稱している感もあるが、国家と禅林の関係を維持するため、儒と禅の境地に差異がないことを指摘し、儒学も欠かせないものと考えている。義堂と義満の交流によつて、禅林と貴族との関係は一層緊密になり、儒学思想はますます浸透し、おのずと忠孝に対する意識も高まっていたと推される。

文章章句は言文の体であり、仁義礼信は人文の体であると定義する。そして人には、父子の間に仁、君臣の間に義、夫婦の間に礼、朋友の間に信があることを指摘する。この仁義礼信は心より出され、文章章句を借りて行われるのである。よつて文章章句は本末の末であり、仁義礼信こそ本なのである。つまり儒学思想をしつかり努めることで、詩文を詠じることができ、その思想を修養した者が文章章句を借りて製した詩文こそ価値が存すると考えているのである。

このように儒学思想が国家において重視され、詩文作成においても必要な要素とされると、中国におけるその模範として杜甫がますます尊崇されるのは必然の成り行きであったと言えよう。そして、初期に較べると、武家との関わりがいつそう密接になったため、杜甫の名を表面に詠出し、儒学思想で重視される忠義を強調する必要が生じたのである。この傾向が強まったため、杜詩を研究するに際しても、忠義の観点から深く考証するようになったと言えよう。石井積翠軒文庫に所蔵されていた『批点本』には、その奥書に「宝徳三年六月廿五日終。右佳初学二番所説。第一論語、第二杜。智與文殊不二、詩兼天神無異」（宝徳三年六月廿五日終。右は初学に佳とする二番に読む所なり。第一は論語、第二は杜なり。智は文殊と不二にして、詩は天神を兼ねて異なる無し）とある。これも杜詩が『論語』と同様の思想を重視されていた結果と言えよう^[6]。

まとめ

日本中世禅林においては、初期より杜甫の忠義は着目されていた。その詠出に関しては、杜甫の詩句や逸話を取り上げ、間接的に杜甫の忠義を称揚するにとどまった。それが中期になると、杜甫の名を直接に挙げ、忠義と共に詠出するようになる。また杜甫の詩を読んだ感想として、忠義を感じ取ったことも詠じるようになる。初期に較べると、杜甫と忠義がより明確化され、杜詩における忠義がより深く理解・考証されたことが窺える。

杜甫の忠義が高く称揚されるようになったのは、先ず第一に禅林と武家社会との関係がより密接になったため、国家に必要な忠義が頻繁に取り上げられるようになったことがあげられる。また儒学思想を会得することは詩文を製するに当たって必要な要素として認められていたことも大きな要因の一つであろう。こうした要因によって、禅僧は初期より忠義の詩人として名高かった杜甫をいっそう敬慕したと言えよう。

今後は、なぜ忠義と言えば杜甫に目を向け、その詩を忠義の面から深く読解したのか、どのように読解し、どれほど深く杜甫の忠義を認識していたのか明らかにしたい。

注

〔1〕朝倉尚「禅林における杜甫像寸見」『文章一小技』と『杜

甫忠心』（岡山大学教養部紀要）第十一号 一九七五）参照。

〔2〕拙稿「日本禅林における杜詩受容―忠孝への関心（初期の場合）―」（『中国中世文学研究』第四十号 二〇〇一）参照。

〔3〕拙稿「日本禅林における杜詩受容について―中期禅林における杜甫画図賛詩に着目して―」（『中国中世文学研究』第四十五・四十六号合併号、二〇〇四）参照。

〔4〕拙稿「日本中世禅林における杜詩受容―『集千家批点杜工部詩集』の中期禅林に及ぼした影響―」（『禅学研究』八六号 二〇〇八）参照。

〔5〕和島芳男著『中世の儒学』（吉川弘文館 一九六五）・市川本太郎著『日本儒教史中世篇』（汲古書院 一九八九）参照。

〔6〕川瀬一馬著『石井積翠軒文庫善本書目』（臨川書店 一九八二）参照。現在、当該書は所在不明。

六朝楽府詠注（十七）―「隴頭水」七首―

小川恒男

はしがき

前稿（『中国学研究論集』第三十三号 二〇一四）の後半で『楽府詩集』巻二十一から始まる横吹曲辞に進んだものの、いつもながらの筆の遅さのために陳後主叔宝の「隴頭」一首しか取り上げられなかった。本稿は梁元帝蕭繹、劉孝威、車壇、陳後主二首、徐陵、顧野王それぞれの「隴頭水」計七首の詠注である。

「隴頭」また「隴頭水」はかなり早い段階で古辞を失い、その模倣作も梁代以前のものは今に伝わらず、現存する作品はすべて梁・陳の詩人たちの手になるものである。『徐陵集校箋』（許逸民校箋 中華書局 二〇〇八）は徐陵「隴頭水」の【題解】で「按、『太平御覽』『樂府詩集』載『隴頭水』多篇、作者有梁元帝・劉孝威・顧野王・陳後主・張正見・江総等、似属君臣唱和之作。其中多数為梁臣、徐陵此篇亦当作於梁。（按ずるに、『太平御覽』『樂府詩集』は『隴頭水』の多くの篇を載録し、作者には梁元帝・劉孝威・顧野王・陳後主・張正見・江総などがおり、どうやら君臣唱和の作であるらしい。これら

の内の多くが梁の臣下であるから、徐陵のこの作も梁代に作られたものだろう。」と述べる。彼らの「隴頭水」は下の【語釈】に引いた「三秦記」に載せる記事や『史記』『漢書』などの史書から得られた文献的知識に基づき、所謂「西域」の表玄関である隴山に立つ旅人たちの別離の悲哀を描き出す。同じ素材で同じ主題を詠うので、千篇一律の感を拭えないのは事実である。また、「君臣唱和」の作だった可能性も確かに否定できない。しかし、「君臣唱和」という場で作られた作品には、それぞれの詩人たちが場を楽しむために凝らした表現上の工夫が見られるように思われる。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）である。

梁・元帝蕭繹「隴頭水」

【本文及び書き下し】

1 銜悲別隴頭 悲しみを銜みて 隴頭に別れ
2 関路漫悠悠 関路 漫として悠悠たり